

小説家加藤周一の賭け―『神幸祭』を読む―

岩津航

小説と批評の関係

小説家加藤周一については、まだ十分な研究の蓄積がない。彼の著書『雑種文化』から『日本文学史序説』まで、あるいは『日本の心とカタチ』から『日本文化における空間と時間』まで、日本文化に関わる批評である。加藤の日本論を取り上げた論考は数多い。一方で、一九四六年の文壇デビューから一九五一年のフランス留学までは、加藤はフランス文学者としても活躍した。これについては、拙著『レトリックの戦場―加藤周一とフランス文学』（二〇二二）で詳細に論じた。同書で取り上げたもうひとつのジャンルが、加藤の小説群である。

作家の仕事を見渡した際に、小説が批評と無関係であるはずはない。同一の作家による批評と小説は、当然のことだが、問題意識を共有している。しかし、それは単に、批評を小説に応用するということではないし、批評によって小説を解説するということでもない。世界を切り取り、世界を作り出す言葉の使い方として、それぞれの

方法がある。

加藤は『群像』一九五八年一月号の創作合評で、中村光夫の戯曲『人と狼』を評しながら、次のように述べている。

ぼくはだいたい小説家とか批評家とかいう区別はナンセンスだと思ふ。つまり、いい批評家というのは大体においていい小説家であるし、いい小説家は同時にいい批評家だと思ふ。だから、いい文学者というか深い文学者と浅い文学者というのがある。そのほうが圧倒的に大きなことで、おもに芝居を書くことになつているとか、おもに小説を書くことになつているとかいうことは、二次的な区別にすぎないのじゃないか。その手近な証拠は幸い今月の作品にあつて、中村光夫さんが芝居を書くということになると、うまいにきまつてるわけだ。中村光夫は普通一般の劇作家よりも立派な文学者だから、芝居を書いたらいいものができるにきまつているということが言えるし、今度は逆に石川淳さんみたいな小説をずっと書いてきた人が「鷗外論」を書けば、職業文芸時評家

よりいいものが書けるにきまつていると思う。だから問題は、エッセイを書きなれてるか小説を書きなれてるかというところとはあまり大きな問題でなくて、文学者の質のほうがずっと大きいのではないか⁽¹⁾。

この基準に従うなら、批評と創作の双方を通じて、加藤周一の文学者としての質を評価しなければならないということになる。

加藤周一には、三つの短編集『道化師の朝の歌』(一九四八)、『三題漸』(一九六五)、『幻想薔薇都市』(一九七三)があり、三つの長篇『ある晴れた日に』(一九四九)、『運命』(一九五六)、『神幸祭』(一九五九)がある。また、雑誌に掲載されたきりて単行本未収録の短編小説(ミチルの手記「一九四八」⁽²⁾、「二重の誤解」⁽³⁾「一九四八」⁽⁴⁾、「香港逃避」⁽⁵⁾「一九五六」など)がいくつもある。『著作集』第一三巻に収録された「人道の英雄」(一九五五)を例外として、これらの短編を読むためには、掲載誌の初出にあたらなければならない。

本論文では、加藤の最後の長篇となった『神幸祭』を、彼の批評との関係において評価する。しかし、そのためには、それ以前の加藤の創作を概観しておく必要があるだろう。

最初の短編集『道化師の朝の歌』は、加藤の戦中戦後の作品を収める。中村真一郎が「戦前の加藤が、高等学校の雑誌や、同人誌『崖』などに発表した、小説やエッセイは、知的で抒情的な、抑制のきいた、幾分、臆病な私小説風の表現を取っていた⁽⁶⁾」と証言しているように、『1946・文学的考察』の口火を切った戦闘的な「新しき

星董派に就いて」(一九四六)とは対照的な、内省的な作風である。一九四〇年代後半の批評において加藤は、「歴史的必然の相の下に社会を見る客観的理性⁽⁷⁾」を見出すことを小説家に要求したが、実作者としては、表題作「道化師の朝の歌」に見られるように、ブルジョワ家庭の心理劇を端正な文体で描き出していた。とはいえ、加藤の小説が理論を引き写した図式的なものではないということは、逆にそこに小説家としての真の主題が表れているとも言えるだろう。それは過去の追憶であり、現実の嫌悪であり、芸術による生活の乗り越えである。そして、意外なことに、これらはすべて、加藤がヴァレリーに倣って批判したロマン主義的な主題だった。

長篇『ある晴れた日に』は、戦中の無力感と、ごく少数の反戦論者の連帯を描く。三部構成になっており、第一部と第三部は信州を舞台にし、第二部は東京大空襲が中心の事件となっている。主人公の医学生土屋太郎と憲兵の水原との関係が、この小説の戦争体験の核心である。戦争の本質は、生命を脅かす戦闘や爆撃にあるのではなく、思想の自由が日常的に制限される心理的抑圧の経験にある。渡辺一夫が本書の序文で、加藤は「総力戦と言われる近代戦争の最も呪わしい広い面⁽⁸⁾」を描き出そうと試みた、と言っているのはそのためである。興味深いのは、この小説の刊行後、加藤がフランスのレジスタンス文学を紹介する『抵抗の文学』(一九五一)を書いたことだ。それは戦争中には無力だった自分を含む日本の知識人と鮮やかな対比をなしており、またサルトルへの接近と時期を同じくして、文学者の社会参加についての関心の高まりを表している。『ある

晴れた日に』から『抵抗の文学』に至る加藤周一の変化は、観察者に徹するしかなかった戦時中の知識人から、そうではないあり方が実現したフランスの条件を経由して、社会的な責任を担う文学者へと関心が推移した結果として捉えることができる。

一九五一年から一九五五年にわたるフランス留学体験は、短編「人道の英雄」と長篇『運命』に反映されている。「人道の英雄」は植民地問題に触れた最初の作品であり、『運命』は明治以来の日本人と西洋文化の対決を、画家を主人公にして描き出す。この対決を脱構築したのが、短編「香港逃避」である。ここでは、英領香港をアジアにおける西洋化の象徴として登場させ、香港化することをアジア的現実からの逃避だと批判している。この短編は「日本文化の雑種性」へ至る加藤の思想の転換点を表している。

最後に、『神幸祭』よりも後の作品であるが、加藤の著作のなかでも最もよく読まれている『羊の歌』『続羊の歌』（ともに単行本は一九六八年刊）にも触れておく。「わが回想」という副題からもわかるように、一般には自伝と捉えられているが、『朝日ジャーナル』連載時には「小説」と銘打たれていた。実際、『羊の歌』には、先行する小説作品のエピソードや主題が取り込まれている。中学時代を「生涯の空白五年間」と呼ぶのは、短編「旅行について」(『道化師の朝の歌』所収)における表現の繰り返しであり、「人道の英雄」や『運命』『香港逃避』や『神幸祭』についても、作中のエピソードが現実の体験として再度提示されている。『羊の歌』は、その意味では自著解説であり、かつ自分の小説を総合する「作品」でもあった。

『神幸祭』執筆の背景

一九四六年から始まった小説と批評の積み重ねのなかで、加藤周一の最後の長篇小説『神幸祭』はどのような意義をもつのか。『神幸祭』は、『群像』一九五八年七月号から十月号まで四回にわたって連載され、一九五九年に講談社から単行本として刊行された。『神幸祭』は九州の炭鉱における労使交渉を主題とする小説である。執筆に先立って、加藤は一九五七年夏に三池炭鉱を訪ね、組合員とも会社側とも話をしている。加藤は当時、三井鉱山に勤務する医師だった。その間の事情を、加藤は次のように述懐している。

私はもともと炭鉱の労働者を診る医者として雇われたのではない。勤務先は、日本橋の三井鉱山東京本社の医務室でした。医務室は人事部の管轄に置かれていました。人事部は労働者を誂首する部署ですから、むしろ会社側で、医務室も会社側に属する。機械的に「労使」で区分けすれば、私は「使」の側で、労働者からすれば「敵」になる。人事部の部長は、医者は完全に会社側の人間だと思っている。

それで、「炭坑を見たい」といったら、どう思ったのか、宿の手配から接待など、あらゆる便宜をはかってくれたんです。三池に着くと、会社側の人間とは適当に付き合って、労働組合に自分

で直接接触した。会社は紹介してくれないから、個人的に取材をした。最初は警戒していましたが、若造だったし、ひとりでノコノコと組合のなかに入っていたので、「敵」という感じがしなかったのかもしれない⁽⁵⁾。

加藤は同時に、会社側の人間として、「綱町（港区三田）の三井俱樂部を利用できる」立場にもあった。そこで聞いた会社側の本音や、三池炭鉱で受けた買収工作（「博多美人」をあてがおうとした）の体験は、加藤の炭鉱探訪に最初から複眼的な性格を与えることとなった。

加藤はおそらく、最初から小説を書くために炭鉱を取材したのではなかったはずだ。しかし、わざわざ九州まで赴いて炭鉱を見学したいと言い出したのは、彼がフランスで読んだ二人の作家の影響なしには考えにくい。一人はサルトルである。上述の買収工作と組合員との対話については、『統羊の歌』でも語られているが、加藤はそこで「客観的な、つまり科学的な判断が不可能であるとして、しかも意見を定める必要があったら、私はどうするであろうか。私は九州でそういうことを考え、坑道のなかへ入った私自身の経験——それがどれほど短かったにしても——へ戻るほかないだろうと思った⁽⁶⁾。」と自らに問いかけている。この問いは、サルトルの「参加engagement」の哲学を意識したものだろう。誰の目にも明らかかな合理性に従って判断できれば、意見の衝突は回避しやすい。しかし、異なる立場にあって、しかもその立場にある限りにおいて、それぞ

れに合理的であるような対立の場合には、どの立場を擁護すべきかという価値判断が求められる。炭鉱の場合で言えば、経営者の論理と労働者の論理は、それぞれの前提に従う限りにおいて、それぞれに正当であり得る。その価値判断の根拠は、もはや対象そのものの中にはなく、世界を誰の視点から理解するかという倫理的な決断に見出すしかない。

もう一人、シモーヌ・ヴェイユとの関係も指摘しなければならぬ。論文「シモーヌ・ヴェーユと工場労働者の問題」（一九五七）の末尾で加藤は、「今夏、九州の炭鉱を訪れたときに、そこで聞き知るあらゆる問題について、彼女の言葉を想出した」とし、「そして想出すことが、どれほど有益かということをもって知った⁽⁷⁾」と述べている。ヴェイユを読んだから炭鉱へ赴いたのではなく、炭鉱へ赴いてヴェイユの意義を再確認したということだが、『神幸祭』を読むうえで、ヴェイユの存在は無視できない。

加藤はパリ留学中に刊行されたヴェイユの『労働者の条件』（Simone Veil, *La condition ouvrière*, 1951）を読み、日本で最初のヴェイユ論を書いた。ヴェイユは哲学を専攻した高校教師だったが、工場労働者となり、二年間の労働経験を、事後的にはなく、現場で考察した。一九五〇年代に著作が死後刊行されると、一気に名声が高まり、現在ではキリスト教神秘主義の哲学者として確固たる地位を得ている。しかし、一九五六年の中島健蔵との対談では、加藤は、フランスではヴェイユのテクストを「誰も、それを文学だと思つてない。一種の生活綴方としてよく書けた立派な物でそういうも

のを土台にしてインテリゲンチヤと労働者の問題を、みんなが考える資料になる(8)」のだと紹介している。

生活綴方運動は、庶民による自己表現の試みとして戦前から行われ、とくに東京下町に暮らすブリキ職人の娘である豊田正子の『綴方教室』(一九三七)が有名である。哲学者ヴェイユによる工場労働を通じて思索を、フランスでは誰も文学だと思っていない、という加藤の発言は、二つのことを示唆している。第一に、加藤自身は、ヴェイユのテキストを文学だと思っているかもしれないということ。第二に、生活綴方は一般に文学だとは思われていないと認識していること。しかし、それは加藤自身が生活綴方を軽視していたということではない。実際、『抵抗の文化』(一九五二)に収められた「青年と読書」では、次のように書いていた。

『細雪』をよむことと、『山びこ学校』をよむことと、どちらがまことの教養なのか。——『山びこ学校』は東北の農村の中学生の作文だが、彼らはその惨めで苦しい生活のなかで合理的にものを考えている。或は少くとも考えようと努力している。『細雪』の登場人物は、どれもこれも、金と暇と多分いくらかの趣味とをもっているが、全く知性をもちあわせていないし、そもそも、もとうとする努力を欠いている。われわれは、教養という観念から、俗悪な装飾的な性質をはぎとり、本来の意味をあきらかにしなげればならない。本来の意味は、自己をつくること、生活のなかで、具体的に、実際に自己を育てることである(9)。

『山びこ学校』(一九五一)は、山形県山元村中学校生徒の詩文集である。社会科教師の無着成恭が編集して刊行されると、全国的に大きな反響を呼んだ。坪田譲治が序文で、「私たちも、この本を読んで、全国の子どもたちに呼びかけ、これをはげまし、力をあわせて、わが国の再建につとめましょう(10)」と述べているように、戦後民主主義のなかで、生徒の主体性を伸ばすという教育理念が、そのまま国を建て直す自立した人間の育成につながっていた(11)。のちに『日本文学史序説』では『細雪』を「日本の小説史上の里程碑(12)」とまで評するようになる加藤だが、一九五〇年頃は、論理的思考を大衆が備えるようになることが真の教養であると考えていた。『抵抗の文化』所収の「日本の女」では、「行儀のよい、しつけのよい、ついでに衣裳のよい、しかし自己の意見を発表することのできない雪子よりも、行儀やしつけや衣裳のわるい、しかし自己の意見をはつきりということのできる戦後の若い人たちがどれほど美しいかわからぬ(13)」と述べている。『細雪』のブルジョワ趣味を「俗悪な装飾」として批判し、自分の意見を述べる能力を称揚する対比的表現は、まさに民主主義の論理の帰結として、加藤が自らに課したレトリックだった。同様の意見は、日本語のローマ字化とヨーロッパ起源の外來語の原語表記をラディカルに主張した「日本語の運命」(一九四九)にも見られる(14)。

しかし、フランス留学後の加藤は、大衆と知識人の関わりという問題について、原則と実態をより厳密に区別して考えようとしてい

た。大衆が論理的思考を実践する意義は認めるが、そのような思考が制度上の改善に繋がるためには、制度側の人間も動かす必要がある。加藤が炭鉱を訪れ、そこで見た労働者と経営者の対立を小説に仕立てようと考えた背景には、制度を強制する資本側に近い知識人がどこまで大衆側に歩み寄れるか、そして大衆はどこまで知識人と論理を共有できるか、という問いがあった。

炭鉱小説としての『神幸祭』

『神幸祭』には、二人の主人公が存在する。一人は矢野仙次、もう一つは津田潤作である。矢野は炭鉱労働者である。炭鉱は所長の河野、事務長の津田、坑夫の父親をもつ社員の広井喜三郎の三名が経営側におり、所長の子飼いの「親分」鈴木が労働者をまとめる。労働者側では、鈴木の子健二郎が組合長を務めている。

この炭鉱組合は、労働者が自発的に結成したというより、大学出身の健二郎が理論先行で立ち上げたものである。「矢野が組合の寄合いに熱心になれなかつたのは、弟がいて、おふくろがいても、坑内直接夫だからやつてゆけるが、組合専従になると、収入が減るということもあった。しかしそれだけではなく、委員長の鈴木の話に、とかく腑におちないところがあつたからだ。学校出の鈴木の話はとにかくむずかしかつた⁽¹⁵⁾。」(八頁)「やつは組合をつくつた男だが、おれたちの仲間じやないという感じは、矢野だけのものではなかつ

た。」(九頁)この設定は、戦後の組合運動がしばしば知識層によって主導されたことを想起させる。

とはいえ、健二郎は結局のところ「親分」の息子であり、その親分は事実上、会社側の人間である。そこで健二郎を追い出し、組合として真剣に保安改善を訴えるため、炭鉱労働者の横田周吾という男が矢野に協力を求める。神幸祭で神輿を担ぐことに生き甲斐を感じていた素朴な青年だった矢野は、先山(「切羽」と呼ばれる採鉱場で、石炭採掘に従事する労働者を「先山」、石炭運搬に従事する労働者を「後山」という)の松尾熊吉の事故死と、それに次ぐ一家心中に衝撃を受ける。松尾の死をきっかけに、「ここに生きている自分自身、その傍で松尾の一家がみな殺しになること、それでも何事もなかつたように万事がはこんでゆくこと、選炭機の音がたとえ一時でもやまず、ボタ山が昨日あつたように明日もそこにあるだろうということに、どうにもならぬ怒りを感じはじめていた」(八四頁)こともあり、横田の要請に応じる。

松尾の事故死の背景として、一九五五年七月に石炭鉱業合理化臨時措置法が制定されたことが挙げられる。一九五二年以降、石油エネルギーへの転換が進み、炭鉱不況が深刻化するなか、この法律は企業による合理化を促進した。合理化とは、具体的には生産性の向上と人員整理である。労働組合は、当然これに反対し、各地の炭鉱で争議が起きた。とくに三池炭鉱では「雇用安定、保安優先、労働条件の向上という長計協定三原則⁽¹⁶⁾」に基づいた交渉が繰り返された。三菱美唄炭鉱労働組合の『炭鉱に生きる』(一九六〇)でも、「組

合が保安要求をおこなうと、経営者は「営利会社の保安にはおのずと限度がある」と自ら告白しているように、儲け本位の資本主義生産機構では災害はなくならない（15）と指摘されている。『神幸祭』の中心的な話題である保安改善は、当時の炭鉱経営合理化の状況下で、避けては通れない深刻な問題だった。

矢野は親分の娘男子に恋心を抱いていた。若い矢野が身近な女性に恋するのは当然にも思えるが、当時の炭鉱には、疑似家族的な経営によって、労働者の不満を封じ込めようとする一面があったことも指摘しておこう。『炭鉱に生きる』によれば、一九五〇年代にアメリカから企業内訓練（TWI）と管理者訓練計画（MTP）が導入され、管理側（職制）が労働者と親しく付き合うようになる。一九五三年には「改善提案制度」を導入して、「労働者を企業意識のなかに閉じこめ、愛社精神を植えつける」^{（18）}ようになった。『神幸祭』では、広井がこの任にあたっている。労働組合からすれば、労使関係をなし崩しにし、疑似家族的な感情でごまかそうとする厄介な存在である。実際、ストライキの是非を議論する際に、「世話をやいてくれた広井喜三郎さんに悪くならうか」（二六一頁）と危惧する組合員が描かれている。

だが、高嶺の花であるはずの男子は妊娠し、相手の社員の男に結婚を断られて途方に暮れる。広井は仲介に入って縁談をまとめようとするが、失敗し、親分に追い出される。所長は親分が会社側の役に立たなくなると知ると、「いっそ健二郎ば手なすくるか」（一七七頁）とあっさり代役を探そうとする。親分も結局は会社側の人間

ではなかった。「もし自分が社員だったら」と叫んだという男子の言葉は、「矢野自身の暗いところから、惨めなもの、ばかげたもの、卑屈でどうにもならないものを、抉り出し、擱み出し、白日の下にさらした。」「略」そのときまで割りきれぬ気持として沈んでいたものは、それが言葉となつた瞬間に、割りきれれるものとなつた。割りきれた瞬間に、男子への暗い執着、眠られぬ夜とその次の朝の後悔は、終わった。（一七五頁）これを階級意識の芽生えとだけ捉えてはならない。むしろ、言語化することによって初めて、自分が置かれた状況を把握したということに注目すべきである。

もう一人の主人公津田は、会社の金策のことばかり考えている事務長だった。松尾の遺族への補償金を出し、保安施設を改善するための資金はどこにもない。だから思わず「わるい時に事故がおこつた」と呟いたのだが、「死んだ者にしてみりや運ふの良かも悪かもなかない」と矢野に言われる。「そう吐き出すようにいつた炭だらけの青年の顔は、払いおとそうとしても払いおとせない粘る物体のように、その日一日津田潤作の意識に絡みついて離れなかった。」（二一一―二二頁）矢野の言葉と汚れた顔から、津田は労働環境の苛酷さを知った。「少くとも津田のなかの何かが傷つけられたことは、確かであり、その傷はいつまでも疼いて容易に癒えなかった。」（二三頁）津田の「傷」とは、資金の使途という命題の向こうに、それぞれの人生を生きる人間がいるという気づきである。

そんな津田の意識の変化を見た矢野は、「事務長に期待しとります」（二三三頁）と言う。しかし、津田の仕事は、労働者の賃金を確

保するためにも、まず会社を救うことであり、そのためにこそ労働者との衝突を回避する必要がある。津田は会社側の人間だが、組合を敵視しない。所長が組合は「アメリカから押し付けられてしまうたけん」と不平を述べると、津田は「少しおかしくないですか。組合運動が共産主義で、その運動を押しつけたのが、アメリカじゃ、まるでアメリカが共産主義を押しつけたようなことですか(三九頁)」と発言し、所長から煙たがられる。所長の言葉は、加藤自身が三池炭鉱の会社側の宴会で聞かされた「組合がいきませんね。あれはアメリカが押しつけたもので、日本の実情に合っていない(四〇)」という言葉を下敷きにしている。

組合活動に深入りした矢野と事務長津田の対立関係は、「少佐」と渾名される石井源治の立ち回りによって、次々に動いていく。石井は過去に別の鉱山で、暴力団によるストライキ破りを追い払うための指揮をとったことがある。松尾の死後、石井は矢野を訪ね、松尾の妻が一家心中を起こしたことを報告し、「このまますむことでなか(八五頁)」と言う。一方で、津田や広井にも接触し、代議員会に「あそび手(暴力団)が来るだろうことを矢野に教える。あらかじめ鶴嘴を用意した労働者たちは、匕首を持った暴力団員を取り囲み、代議員会の進行を矢野と横田が支配して、鈴木組合長の解任を求める。石井は、炭鉱組織の両極を自在に行き来して、情報を流し、事態を動かしていく。しかも、その狙いが何であるのかは、矢野にも津田にもはっきり分らない。

加藤の証言によると、石井には特定のモデルはいない。しかし、

戦後の復員兵が「労働者として労組にシンパシーを感じていて、それで戦場での経験が闘争に役立つことがあったようです(二〇)」と言っている。実際、戦後の炭鉱における労働争議の頻発は、単に石炭産業が衰退する局面にあっただけでなく、従来は小学校卒業程度が多かった現場に、復員してきた中等教育以上の学歴をもつ労働者が流入したからでもある(二一)。石井の存在は、『神幸祭』が「戦後」小説であることを印象づけるものである。

石井の進言に従って、津田が河野所長を坑内見学へ行かせたところ、所長は坑内で行方不明になる。前日の嵐で出水が激しくなっており、切羽で転落事故を起こしたと思われたが、ポンプ座の近くで石井を目撃したという証言が出る。石井を探し出した津田には、石井が、「いくさがあり、大東亜共栄圏があつた後に、労使協調や民主主義があり、主義主張のために右往左往しながらどこまでも対立し、争い、踏みはずし、それでも生きてゆこうとする人間の世の中の全体を笑っているようにも思われた。」(二二頁)加藤もまた相対的な視点を提示するが、すべてを相対化するように思われた石井のニヒリズムや実力行使の正当化には与せず、津田と矢野による協議が事態を打開する可能性に賭けている。

実存主義小説としての『神幸祭』

炭鉱を題材にした小説は夏目漱石の『坑夫』を嚆矢として、石炭

が主要なエネルギー源だった戦前から、とくにプロレタリア文学の作家たちが数多く発表している。そこには、たとえば朝鮮人労働者の苛酷な環境が生々しく描き出されている。池田浩士の『石炭の文学史』には、炭鉱を扱った作品の網羅的な文献リストが掲載されているが、加藤の『神幸祭』は見当たらない⁽²²⁾。

『神幸祭』と刊行年が近い小説として、たとえば井上友一郎の『火の山』(一九五五)が挙げられる。井上といえば、東京の風俗を描いた大衆小説家というイメージが強いが、じつは炭鉱で働いた経験がある。『火の山』では、「F県K郡N村にある興和礦業株式会社所属の炭坑(本社東京都千代田区有楽町、社長藤江良策氏)⁽²³⁾」で落盤事故があり、五人の坑夫が閉じ込められる。そのうちの一人の娘と、別の一人の婚約者がそれぞれ「特飲店(特殊飲食店、つまり売春宿)へ身売りしたことを知った相良記者が、特集記事を書く。しかし、新聞社には「赤だ」という投書が来て、最初は親身にいろいろ教えてくれた労務係長も、坑夫の情報を売っているとされるのを怖れて、相良と距離を取るようになる。婚約者を取り戻せなかった男は、「ダイナマイト自殺」する。相良は身売りした娘の客として通い、とうとう身請けして彼女を東京へ連れて行く。小説は、相良の記事や私信、国会での売春禁止法をめぐる答弁などを織り交せて、貧困から身売りする女の悲惨に焦点を当てている。事故死した炭鉱夫の家族が社宅から追われる危機についても言及がある。井上の関心は、炭鉱労働者の人権が著しく抑圧されていること、とりわけその家族の女性が社会的弱者として苦しんでいることに向けられている。

プロレタリア小説ではない『火の山』と比べても、『神幸祭』は、炭鉱小説にしては思弁的すぎるくらいがある。発表当時の『新日本文学』の書評では、労使対決を主題とすべきなのに、作者の関心がそちらに向かっていないせいか、図式的な構図にとどまっており、むしろ矢野と津田の心理的变化に焦点が当てられている、と指摘されている。そのうえで、加藤の心理は津田の方により近く、それだけに資本家側の論理を捨てないまま、労働者側に歩み寄ろうとする津田の「冷酷さ」を、加藤に重ねて批判している⁽²⁴⁾。また、一九九八年の『民主文学』の書評は、矢野と津田の対立に触れて、「そこに永遠に和解できない階級対立を加藤は見た⁽²⁵⁾」と結論づける。どちらも共産党系の雑誌であり、労働問題への関心から本作を取り上げたものの、明確に労働者側に立つて話が展開しない内容に失望した、と考えられる。

片岡大右は、加藤が「階級間に避けがたい対立を見定めて両階級の闘争を調停不能のものとみなすたぐいの弁証法的論理には不信感を抱いていた⁽²⁶⁾」と指摘したうえで、『神幸祭』について次のように述べている。

ここで注目したいのは、矢野たちが組合運動のさなかで、共産主義者の委員長長の追放を画策し、「独占資本」との対決といったスローガンを空疎なものとして打ち捨ててしまうことだ。まさにこうしたプロセスを経て、矢野は自らの階級性を改めて自覚し、経営側を代表する津田とのあいだに、新たな労使関係を構築してい

くことを予感させつつ作品は終わる。そこで予感される関係とは、一方では、当時「総労働対総資本」などと言われた決定的な対立の論理を離れ、しかし他方では、経営側が掲げる労使協調の予定調和とも異なった、ある緊張をはらんだものだ⁽²⁷⁾。

加藤は、心情的には労働者を擁護する側にあつた。また、すでに紹介したように、個人的にも資本側の買収工作に遭うという不愉快な体験もしており、会社側への反感をもっていたはずだ。にもかかわらず、階級闘争の図式に沿つては、話は展開しない。加藤の関心は、現実的に両者が歩み寄れる場所を探るためには、資本家対労働者という二項対立とはまた別な契機が必要なのだとということにあつた。とりわけ、津田が矢野に歩み寄るためには、鈴木健二郎のような理論からの出発では不十分であり、現実を変える必要性を内在的に納得していなければならない。では、その必要性はどこから来るのか。

矢野の場合は、松尾一家の無惨な死である。津田の場合は、金策の失敗と、それに伴う愛人との関係の頓挫である。つまり、仕事と生活の両方で行き詰まりを感じている。自分は何をしているのかという自問を深めていくなかで、河野所長が「機械人形」のように見え、「この機械をぶち壊して止めたい」という奇怪な衝動を覚え⁽²⁸⁾（一九九頁）に至る。所長の機械的な反応を非人間的であると感じた津田は、会社側の論理を拒否して、矢野と向き合う決意をする。このように見てみると、『神幸祭』は、筑豊の炭鉱で起きた事故をきつ

けに労働組合に関わっていく矢野と、結婚生活に倦んでいた津田が、それぞれに実存的な目覚めを経て接近する物語である、とすることができる。実存的な覚醒とは、自分の選択が人生の全体に係わることを自覚するということである。二人は階級闘争とは別のところから、しかし結果的には階級的対立を含んで、出会い直すのである。

小説の最後、石井は落盤事故で脚を挟まれてしまう。矢野は現場に駆けつけ、「石井の苦痛と恐怖が突然矢野自身のものになつた」（二三五頁）のを感じる。「矢野、殺せ」という石井の命令に彼は従う。それはもはや組合運動とは関係なく、石井の人生の意味に関わる決断である。「脚をきれば、たとえ助かつても、石井源治は石井源治でなくなるだろう」（二三四頁）という実存の問題として、矢野は石井を殺した。矢野の行為は、彼自身が人生の意味というものについて見識をもっていたことを示している。

知識人論としての『神幸祭』

『神幸祭』の連載と同時期の一九五八年に、加藤は『政治と文学』という評論集を刊行している。そのなかで政治をめぐる同時代日本の言説のなかに、状況を変える必要性を説きながら、その手段を考えない「理想主義的な超現実主義」と、状況を変えることはできないという現実追認の「擬似現実主義」を見出し、その両方を批判した⁽²⁹⁾。『神幸祭』の労使対立には、こうした二元論そのものを批判

する意図があった。

また、同じ『政治と文学』において、加藤は日本の再軍備に触れ、それを国家としての反民主主義であるとしたうえで、次のように指摘している。「もし身の廻りに活発な組合があり、たとえば一会社の規模でも自分たちの意見が会社内の何かを動かしてゆくという事実があれば、その人々は国家的規模での反民主主義的傾向に対して批判的となるだろう。しかしもしもそういう事実が身の廻りになく、長いものに巻かれ、我が身の出世のためには上役にとり入るといふ以外に考えもないとすれば、国家的規模での反民主主義を反民主主義としてはつきり意識する用意もないということになるう⁽²⁹⁾。」身近な環境で議論を通じて物事を決定しているプロセスが民主主義であるとすれば、それは組合だけで生じるものではない。『神幸祭』では、津田が自分で事態を考察し、行動し始めるところにも、民主主義の可能性が見出されると言えるだろう。

ところで、小説『神幸祭』の目立った工夫の一つに、方言の導入が挙げられる。加藤は『続羊の歌』で次のように述べている。

私は西洋での経験に空想をまじえて小説「運命」をつくり、炭鉱での見聞を粉飾して小説「神幸祭」を書いた。「神幸祭」は「じんこうさい」と読み、北九州の炭鉱夫の祭である。私はその小説を書くに当って、方言にも関心を抱いていた。その土地で育った人から方言を習って、会話の部分方言で書いた後、もう一度その知人に手を入れてもらった。かねて東京の話ことばが、生々と

してはいるけれども、安定した形を欠いていると考えていたので、方言を使うことで会話にいくらか安定した形をあたえることができるかもしれない、と思ったのである。しかし結果は小説を読みにくくしたただけであったかもしれない⁽³⁰⁾。

ネイティブ・チェックが入っただけあって、筑豊弁の会話は滑らかで、声に出して、読みにくいということはない。ただし、加藤がここで「安定した形」と言っている意味はよく分からない（ついでに言えば、この小説の題名が『神幸祭』である理由もよく分からない）。東京の話し言葉との対比でそのように評価しているらしいが、東京の言葉には土地に根ざした実感が無いということを指しているのだろうか。確かなのは、矢野や石井が話す筑豊弁が、津田の「奇妙に冷たい標準語」（二二五頁）と対立しているということである。その標準語は、単に東京出身者というだけでなく、知識人に特有の言葉遣いを指している。炭鉱労働者だけでなく、所長の河野も広井も筑豊弁で喋り、津田と彼の妻だけが標準語を話す。つまり、方言は階級対立ではなく、労働者と知識人を区別する言語的な指標として機能している。あるいは、炭鉱社会の内部と外部を区別する指標となっている。

知識人としての津田は、外部の人間である。彼が炭鉱の内部の人間へと転換する契機は、他人の死である。津田は石井の提案に乗って間接的に河野所長の事故死を引き起こし、矢野は落盤事故に遭った石井にとどめを刺した。二人はそれぞれ他人の死を引き受けた状

態で、矢野は組合代表として、津田は会社を代表して、再び対面する。それは、自分の力ではどうにもならない状況を通り抜け、自分の責任において他人の人生に干渉してしまった人間同士の対面であり、小説冒頭の出会いに比べて、二人とも生きるということへの意識が変化している。津田が石井の死について、「今度の事故は全く運が悪かった」と言うと、「死んだ者にしてみりや運の良かも悪かもなかない」（二四〇頁）と返される。それは松尾熊吉の事故死に際して、かつて矢野が呟いた言葉だった。「その言葉と共に津田潤作は、新しい相手との新しい戦いがまさにはじまろうとしているということをはつきりと感じた」（二四一頁）という一文で、『神幸祭』は締めくくられる。

この「新しい戦い」とは何か。労使交渉自体は、何も新しいことではない。矢野の呟きが小説冒頭と同じなのは、状況自体は変わっていないことを示唆している。新しいのは、津田が愛人を失い、金策に失敗して、自分の人生の「戦いに敗れ」（二三九頁）たことを認識し、そこから新たに生き直す決意をしたからである。戦いとは、組合を相手に勝とうとすることではなく、労働者と経営者の言い分が対立した際に価値判断を求められる葛藤のことである。その葛藤のなかで、会社経営が許す現実的な範囲で、どこまで誠実に考え抜けるかということが、津田の戦いとなるはずである。それは『政治と文学』において加藤が、日本文化の雑種性を擁護したことや、政治における民主主義のあり方を現実的な条件のもとで考察したことと、同質の問題なのである。

最後の長篇となった『神幸祭』は、大衆と知識人の問題を考えていた加藤周一にとつて、二項対立的な闘争の論理から身を引き離して、具体的な現場に身を置いて考え続けるための思考実験として、重要な意味をもっていた。批評が小説か、という区別よりも、批評と小説のいずれもが、一人の「文学者」としての加藤周一の表現であったことを、『神幸祭』は見事に示しているのである。

注

- (1) 加藤周一・中村真一郎・福永武彦「創作合評 第一二八回」、『群像』一九五八年一月号、二七九―二八〇頁。旧字体を新字体に改めた。
- (2) 中村真一郎「増補、戦後文学の回想」、筑摩叢書、一九八三年、六三頁。
- (3) 加藤周一「リアリズムと小説」、『文学と現実』、中央公論社、一九四八年、二三頁。旧字体を新字体に改めた。
- (4) 渡辺一夫「序」、加藤周一『ある晴れた日に』、岩波現代文庫、二〇〇九年、vi頁。
- (5) 加藤周一「凡人会『ひとりいいんです』、講談社、二〇一一年、一〇一頁。立命館大学図書館加藤周一文庫が所蔵する「一九五七年次手帖」には、炭坑夫の給料や住宅設備、組合などについてのメモが残されている。
- (6) 加藤周一『統羊の歌』、岩波新書、一九六八年、一七四頁。
- (7) 加藤周一「シモース・ヴェューユと工場労働者の問題」、『現代ヨーロッパの精神』、同時代ライブラリー、岩波書店、一九九二年、二二四頁。
- (8) 加藤周一・中島健蔵「ヨーロッパを通して打診した日本」、『新日

本文学』一九五六年一月号、一三八頁。

(9) 加藤周一「青春と読書」、『抵抗の文化』、未來社、一九五二年、一一一―一二頁。旧字体を新字体に改めた。

(10) 坪田譲治「本のはじめに」、無着成恭編『山びこ学校』、岩波文庫、一九九五年、八頁。

(11) 戦後の農村における教養主義の浸透とその限界については、福岡良明『勤労青年』の教養文化史、岩波新書、二〇二〇年、を参照。

(12) 加藤周一『日本文学史序説下』、『加藤周一著作集』第五卷、一九八〇年、四七〇頁。

(13) 加藤周一「日本の女」、『抵抗の文化』、前掲書、三六一―三七頁。旧字体を新字体に改めた。

(14) 加藤周一「日本語の運命」、『美しい日本』、角川書店、一九五一年、二二―二三七頁。

(15) 加藤周一『神幸祭』、講談社、一九五九年、八頁。以下、『神幸祭』からの引用はこの版に拠り、本文中に頁数を記す。

(16) 三池炭鉱労働組合『みいけ20年』、労働旬報社、一九六七年、一八八頁。

(17) 三菱美唄炭鉱労働組合『炭鉱に生きる』、岩波新書、一九六〇年、一九六頁。

(18) 同上、一七九頁。

(19) 『統羊の歌』、前掲書、一七二頁。

(20) 『ひとりでいいんです』、前掲書、一〇三頁。

(21) 高橋伸一・若林良和「炭鉱労働者の移動と旧産炭地の社会変動」、『社会学研究所紀要』第一号、佛教大学、一九九〇年、四九頁。

(22) 池田浩士『石炭の文学史』、インパクト出版会、二〇一二年、xxvii。

(23) 井上友一郎『火の山』、『井上友一郎集』、新選現代日本文学全集23、筑摩書房、一九五九年、二七〇頁。

(24) 武田桂二郎「主題の図式性と心理の液体化」、『新日本文学』一九五九年八月号。

(25) 久野通広「神幸祭」に見る「戦後派」加藤周一、『日本文学』一九九八年八月号。

(26) 片岡大右「非ヘーゲル的な夕暮れへの招待」、三浦信孝・鷲巢力編『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』、水声社、二〇二〇年、二〇二頁。

(27) 同上、二〇三頁。

(28) 加藤周一「風向きの変化と日本の現実主義」(一九五八)、『政治と文学』、前掲書、二六六頁。理想主義と現実主義の対比は、ヴァレリーの「理想主義はおよそ勝ち目がなく、深く傷ついて、自らの夢の責任を問われている。現実主義は欺かれ、痛打され、幾多の犯罪と過誤に打ちひしがれている」(ヴァレリー「精神の危機」、恒川邦夫訳、岩波文庫、二〇一〇年、一二頁)という論法を思わせる。

(29) 加藤周一「今日の文学の問題」(一九五七)、『政治と文学』、平凡社、一九五八年、一四七頁。

(30) 『統羊の歌』、前掲書、一七五頁。

*本論文は、第三回「加藤周一おしゃべりの会」(二〇二二年一〇月三十一日、オンライン)での報告を基にしている。会員の意見や批判が大変有益であった。記して感謝の意を表したい。また、本論文は基盤研究(C)「一九四〇年代の若手文学者ネットワークと「世界文学」概念―福永武彦を軸に」(PSP19K00537、研究代表者・西岡亜紀)の助成を受けた研究成果の一部である。